親鸞における浄土教思想の展開

菊村紀彦

親鸞は、基調としての浄土教思想を大きく展開させた。そのことは、既に先覚諸師のご指摘が存在する。そこで小論文においては、原点を参照しながら仏教学的立場で考察したいと思う。

内容を大別すれば、次の三項目になるであろう。一、は「浄土観」、二、は「阿弥陀仏観」、三、は「自然観」である。

浄土の問題は、無論、浄土教信仰上根本のものである。この国が敗戦するまでは、浄土を分析することは、タヴーになっていた。金子大栄師は、その著書名に「浄土の観念」としただけで宗籍剝奪され、大学から追放というきびしい処分を受けたことでも、如実であろう。しかし、親鸞は七世紀ほど前から既に分析しているのである。

「教行信証」では、三部経をそれぞれ真仏土・化身土にあてはめている。「無量寿経」の説く世界（ここでは極楽の形相ではなく、四十八願といった思想体系）を、「真仏土」としている。

「按二真仏土一者、仏者則是不可思議光如来、土者亦是無量光明土也（真仏土巻）」とある。それは「則酬二報大悲誓願一故曰二真仏土一」だと記されている。大悲の誓願そのものが、真仏土の核なのである。金銀や宝石の眩いいわゆる形ある極楽浄土を意味しない。同じ「真仏土巻」には善導の「法事讃」が引用されている。「極楽無為涅槃界」である。涅槃という表現から、単に精神界のみの安心（あんじん）と読み取る思考が、明治以後に出現する。たしかに、精神の救済を究極の目的とすることが、宗教の本義であることを否定するものではない。仏教そのものが、そうなのであるから……。

しかし、親鸞の真仏土を考える時、この「法事讃」よりさきに引用されている「観経疏」の「玄義分」に注目したい。ここでは、浄土が阿弥陀仏の報土であることの論証に違いないが、重要な点は、空性であろう。わたしは、先に浄土を三種に分類した。一、は、経典に説かれている浄土、二、は、念仏によって感得せられる浄土、三、は、空性の浄土であ

る。親鸞のいわれる真仏土は、この二類に当ろう。つまり、無為涅槃界をいうのである。しかし、空性なる浄土といってしまえば、パトスとしての宗教には該当できなくなるから、涅槃を説いたのであろう。現に、「玄義文」を読み進んでゆくと、「摩訶般若波羅蜜経」の「涅槃非化品」に出逢う。善導の引用であるから親鸞は、いわゆる孫びきということになるが、ここに極めて重要な浄土論が隠されている。さきの分類に従えば、三類である。核心は、「諸法性常空、性空即是涅槃」という部分だ。しかし、ここでは須菩提（Subhūti）の問いに釈尊が、「新発意菩薩、聞二是一切法皆畢意性空、乃至涅槃亦皆如レ化者、心則驚怖」と答えている。

このように空性の浄土は、筆舌に尽くしがたいのである。浄土教は、曇鸞に至って空思想で釈すという思考を残してはいるが、禅系統とは異なり、一般的とはいえない。「彼[4]浄土是阿弥陀如来清浄本願無生生」といっても理解はむずかしかろう。その故に、称名念仏という易行を前面に押し出したのである。それかあらぬか、親鸞は、空性の部分を引用しているけれど、しかし、結釈文には浄土が「報土」であり、真仏土とは「無量光明土」であるとだけ記されている。だから、三類に関する限り、親鸞は、決して展開してはいない。

大きな展開は、真仏土と化身土に分けた浄土論であろう。化身土は「観経浄土是也」や「不定聚機難思往生阿弥陀経心也」である。「愚禿鈔」によれば、「無量寿経」は難思議往生、「観経」は雙樹林下往生、「阿弥陀経」は難思往生としている。難思議が、十八願をあらわすに対し、雙樹林は二十願、難思は十九願であるという解釈である。親鸞は「法事讃」からの引用を記しているが、しかし、善導の三往生は、三部経を当てはめたものではなく、後尾に「楽」という文字が付せられているところを見ても、単に安楽・安養を意味するもので、三往生を差別しているものではない。三部経に当てはめたのは、やはり、親鸞の展開に他なかろう。難思議も、難思も、梵語の（acintya）の漢訳だと考えられるから、語源的には同意である。不可思議も、不思議も（acintya）の漢訳が一般的だが、親鸞は、前者を仏（真如）に、後者を文字通りに解釈、展開させたことは、かつて本紀[5]要に記した。

次に、阿弥陀仏観である。親鸞が「無量寿経」下巻の「聞二其名号一信心歓喜、乃至一念、至心廻向」の「至心に廻向す」を「至[6]心に廻向せしめたまえり」という送り仮名を付していることは、よく知られている。つまり、自動詞ではなく、他動詞的に解釈しているのである。阿弥陀仏をあらわすのに、いちばんふさわしい表現であろう。他力をいい得て妙である。送り仮名を自由につけるのは日本独特の手法で天台では転声釈と呼ぶ。比叡山出身の親鸞が、たとえ「法華経」を捨象したにせよ転声釈という思考方式を身につけていたとして

も何等不思議ではない。廻向は、梵語の（pariṇāmanā）の漢訳である。善行を為して得た悟りを衆生にふり向け、功徳を与えることを意味する。完全をあらわすpariという副詞と転ずるという動詞のnamatiが復合されたものであろう。親鸞は、しかし、廻向を功徳（guṇa）のように展開させているのである。

この廻向は、極めて重要な浄土教概念なので、ひとたび原典に立ちかえる必要があろうかと思う。試みに「無量寿経」の原典[7]を開けば、この漢訳経典下巻の「衆生（念仏）往生の因」とは、かなりの距たりがあることが分明する。

「Ye kecit sattvās tasya'mitābhasya tathāgatasya nāmadheyaṁ śṛṇvanti, śrutvā cāntaśa ekacittotpādam apy adhyaśayena prasādasahagatam utpādayanti, sarve te'vaivarttikatāyāṁ saṁtiṣṭhante'nuttarāyāḥ samyaksaṁbodheḥ.」

「いかなる衆生も、阿弥陀如来の名を聞き、聞き終って、たとえ、ただ一度でも清浄の深い信心を発起するならば、みなことごとく正定聚に位置することができる」

原典には、廻向なることばは出ていない。しかし、ekacittotpādamとあるから、一念なのである。まさに法然の「一念にても生ず[8]」の、あの一念に相応する。ただし「無量寿経」の「願生彼国、即得往生、住不退転」とは、至心に廻向することによって不退転に住することができるのである。しかし、本願他力の思想を徹底させるには、仏の方から廻向するという表現ほど適切なものはなかろう。親鸞の「廻向したまえり」は、たとえ梵語原典に、廻向なることばがなくても一念で正定聚に達するという強い誓願の表徴ではなかろうか。「本願[8]招喚の勅命」は、帰命の釈としているが、「廻向したまえり」の志向である。一念イコール廻向と考えてもよかろうかと思う。

親鸞の日本的解釈とはいえ、この読みかえは、仏教の根幹をなす「仏による救済」を、他力易行門のうえに照射した見事な展開である。単に転声釈という以上にスケールの大きな表現といえよう。また、化身土巻には「論語」を読みかえしている他、漢字圏の妙味を生かして、ひたすら本願他力を鼓吹している。

自然観としては、親鸞八十六歳の頃、関東の弟子に送った消息[10]が、従来の印度・中国で概念となった自然を著しく展開させている。「無上仏ともうすは、かたちもなくましまします。かたちもましまさぬゆえに自然とはもうすなり……阿弥陀仏は、自然のようをし（知）らせんりょう（料）なり」

阿弥陀仏という浄土教主の名前も、ここでは無上仏となっている。浄土教とは、仏の本願を信じて、念仏して救われるという教えである。論理ではない。そこで「義なきを義とす」と記している。つまり「仏智の不思議とは」義なきもの

であって、自然なのである。元来、阿弥陀仏は、絵画的[11]であり、超人的存在として画かれている。浄土経典を読む限り、そのことは否定すべきではなかろう。また、そのことによって数え切れない人たちが救われたのだから……。しかし、経典の深奥に流れるもの、強いていうなら哲学的要素を感得せねばなるまい。浄土教という宗教が、仏教という名の旗印しを持つ以上、何等かのロゴスを持っているはずである。また、演繹されることも必要なはずだ。

親鸞は、その晩年において自然法爾を法悦としている。これは、恐らく青・壮年時代から大きく展開したことを意味する。ただし、「浄土文類聚鈔[12]」では、実相とある。「寂滅すなわちこれ実相。実相すなわちこれ法性、法性すなわちこれ真如、真如すなわちこれ一如なり」

ここでは、実相、つまり自然なるものは、真如法性だと考えている。阿弥陀仏を法身仏、真如法性にとらえているところに注目したい。色も形もない仏。それは、しかし、一般の、形ある仏への信仰者にはと惑いを感じるに違いない。そこでこの「自然法爾の法語」を親鸞の直説とせぬ宗門もあったようだ。ふりかえって現代人の立場から見れば、親鸞の分析的・怜悧なこの指摘は、多大の説得力を持つといえよう。浄土教信仰不毛を伝えられる折柄、親鸞の思考に還ることが必須ではあるまいか。

また、「義なきを義とす」というパトスも尊重せねばなるまい。さもなければ、せっかく、親鸞の展開した広大な視野を遮ることになろう。浄土教を単なる形而上学にしてはならないのである。

1　一九二八年六月　大谷大学追放事件。
2　「法事讃」下巻。
3　「印度学仏教学研究」二十八巻一号。
4　曇鸞「浄土論註」下巻。
5　「印度学仏教学研究」二十五巻一号。
6　「教行信証」信巻では「廻向せしめたまえり」とあるが「浄土文類聚鈔」では「廻向したまえり」としている。
7　「Sukhāvatī-vyūha」足利本の四十二頁漢訳「無量寿経」下巻「衆生往生の因」。
8　「百四十五箇条問答」所載。
9　「教行信証」行巻　ただし善導「観経疏」散善義巻「二河白道」より
10　「末燈鈔」五通「自然法爾の法語」。
11　「観無量寿経」「阿弥陀経」。
12　「浄土文類聚鈔」「無量寿経」の自然の部分を私釈。

（日本仏教思想研究所長）